

大嘗祭御祭神考

加 茂 正 典

一、大嘗祭の御祭神

大嘗祭は、十一月の下の卯の日の夜と翌未明にかけて、黒木で構作された大嘗宮の悠紀殿・主基殿において、新帝が神饌を供進し自らも召し上がる、一代一度の国家祭祀である。大嘗祭においてお迎えする御祭神については、平安前期の『儀式』巻二・三・四の「踐祚大嘗祭儀」、また、『延喜式』の「踐祚大嘗祭式」・「祝詞式」などには明記されず、ために古くより諸説がある⁽¹⁾が、天照大神であることが文献上確認される最古の資料は、『後鳥羽院宸記』⁽²⁾建暦二(一一二二)年十月二十五日条である。

本条は、同年十一月に予定される順徳天皇大嘗祭を前に、後鳥羽上皇が順徳天皇に教示した、大嘗宮における天皇御親告祝詞(御告文)であり、「公家於悠紀・主基神殿可被祈請申詞、一昨日廿三日教申之。此事最秘藏事也、代々此事不載諸家記、又無知人歟、殊秘藏為事也。其詞云。坐伊勢五十鈴河上天照大神、又天神地祇諸神明白、朕因皇神之広護、國中平安、年穀豊稔、覆壽上下、救濟諸氏(民)。仍奉供今年新所得新飯如レ此。又於朕躬、攘除可レ犯諸災難於未萌、不祥惡事遂莫犯来。又於高山深谷所々社々大海小門(川)而、記レ

名厭祭者皆尽銷滅而巳」とあるように、卯日の夜と翌未明に、大嘗宮（悠紀殿・主基殿）において天皇が、皇神の広き護りによって「国中平安、年穀豊稔」以下を祈請するのは、第一に、伊勢の五十鈴河上に坐す天照大神であることが確認される。

右は十三世紀初頭の史料であるが、大嘗宮にお迎えする御祭神が天照大神であることを示唆する史料はもう少し遡ることが指摘されている。神座が舗設される悠紀・主基両殿において、天皇が東南（京都より東南の伊勢）に向かって着座されていることが確認されるのは、十二世紀初頭の史料である。『江記』^③天仁元（一一〇八）年十一月二十一日条（鳥羽天皇大嘗祭）に「如_三東座、少巽」とあり、また、『大嘗会卯日御記』^④保安四（一一二三）年十一月十八日条（崇徳天皇大嘗祭）に「着_二御東御座、向_レ巽」と見え、天皇が東南に着御されるのは、その方角の伊勢神宮に坐す天照大神をお迎えし、神饌を天皇自ら奉るためであろう^⑤。

二、伊勢の斑席（まだらむしろ）

大嘗宮にお迎えする御祭神が天照大神であることが、文献上確認されるのは十三世紀初頭の鎌倉初期で、天皇御座が東南に舗設されることが文献上確認されるのは、十二世紀初頭の平安後期であることは既に指摘されている。大嘗祭の御祭神を考える上で、従来看過されていた史料があると思われる。大嘗宮内部の舗設である。

大嘗宮の構成と殿舎仕様が詳細に窺える最古の史料は、平安前期（貞観期）成立の『儀式』であり、『儀式』卷三「踐祚大嘗祭儀中」に詳細に規定されている^⑥。同規定によると、大嘗宮は悠紀院と主基院から構成され、両院の各殿屋は同じで、位置は中央の中籬を基点として左右対称に構作される^⑦。悠紀院は南北に区分され、南の区画に悠紀

の正殿（悠紀殿）と御廁（みかわや）、北の区画には神饌を調備する膳屋（かしわでのや）・白屋（うすのや）、神服柏棚（かむみそのかしわだな）が構作される。

正殿の構作については、『儀式』踐祚大嘗祭儀（以下、「踐祚大嘗祭儀」と略称）に、まず「其南縦五間正殿一字長四丈、廣一丈六尺、柱高一丈、椽長一丈三尺、以葛野席覆其上、椽高四尺、以北三間爲三室、南戸部席、以南二間爲堂、堂置五尺堅魚木八枝、着搏風」とある。

正殿は五間の殿舎で、間口二間、奥行五間、南北の長さ四丈、東西の広さ一丈六尺とあるので柱間は八尺。殿内は、北の三間の「室」（ここに神座が鋪設される）と、南の二間の「堂」（前室に当たる）に分かれている。椽（たるき）は、屋根を支えるために棟木から軒まで並べて渡す木で、その椽の上に、葛野席（かどのむしろ）席は藺・藁などで編んだ敷物）を覆うのは、萱を葺くための屋根の下地とするためである。葺（いらか）上棟、屋根の最も高い所）には、五尺の堅魚木（かつおぎ）八枝を置き、搏風（ちぎ）破風の木材を棟上で交差させたもの）を着ける。

次に、「搆_レ以_二黒木_一、葺_レ以_二青草_一、其上以_二黒木_一爲_二町形_一、以_二黒葛_一結_レ之、以_二檜竿_一爲_二承塵骨_一、以_二黒葛_一結_レ之、以_二小町席_一爲_二承塵_一、壁部_レ以_二草_一、表用_二伊勢斑席_一、裡用_二小町席_一。鋪_レ地以_二束草_一所謂阿、都加草、以_二播磨簀_一加_二其上_一、簀上加_レ席」とある。

構作は、総て黒木（くろき）皮付きのままの木材）を用材として構築される黒木造りで、屋根は青草（かや）萱葺きである。そして、葺いた青草の上に、黒木で作った格子状の枠を乗せて押さえとし、黒葛（つづら）で結び付ける。天井には、小町席（こまちむしろ）を承塵（しょうじん）防塵用の布）として張り渡し、承塵骨（しょうじんのほね）承塵を支えるもの）である檜の幹に黒葛で結び付ける。

壁は草を芯として作り、表には伊勢斑席（いせのまだらむしろ）、裡（うら）には小町席（こまちむしろ）を用い化粧する。また、床については、地面に、束ねた草である束草（あつかかや）を敷き詰め、その上に播磨の簀（す竹等を粗く編んだ敷物^⑧）を置き、さらに簀の上に席（むしろ）を加える。

南の堂については、「其堂東南西三面、竝表葦簾、裡席障子、但西面二間卷簾」とあり、堂の東・南・西の三面総ては、表は葦簾（あしのすだれ）、裡は席障子（むしろのしょうじ 席を張った障子）とする。但し、堂の西面の二間は簾を巻いておく。堂の床は、室と基本的に同じであるが、十世紀の『延喜式』巻七「踐祚大嘗祭式」（「踐祚大嘗祭式」と略称、以下同じ）によれば、堂は束草と播磨簀だけで、その上の席は加えられない。

「儀式踐祚大嘗祭儀」に依拠すれば、大嘗宮の正殿（悠紀殿・主基殿）は黒木造りで、屋根は草（萱）葺き。室は、草を芯として壁を作り、伊勢斑席と小町席で化粧する。堂の東・南・西の三面は葦簾を垂らし席障子で仕切る。従って、壁が設けられるのは室の北・東・西の三面で、南は出入口口であるので、閉じれば、壁などを塗りこめた室（むろ）のような空間となる。室に進めば、草（萱）の匂いが漂ったであろう。また、床は、地面に束ねた草を敷き、その上に播磨簀を置いて作る。さらに室のみは播磨簀の上に席を加える。

正殿を中心とする大嘗宮は、大嘗祭齋行のためだけに構作される、入念ではあるが、簡素・素朴な神殿であり、悠紀・主基両国の人夫（よほろ）によって五日間の内に構作され、神事が終了した辰日の早朝（卯二刻）には、両齋国の人夫によって壊却される。

ここで着目したいことは、正殿（悠紀殿・主基殿）の北三間の「室」の壁は、表を伊勢斑席、裡には小町席で化粧

されることである。室は、神座と天皇の御座が鋪設される空間で、天皇は卯の日の夜と、翌未明に神をお迎えして神饌を奉られるので、ここでいう「表」とは室の内装の表面化粧のことであろう。「裡」は室の外壁の化粧と考えられる。

この伊勢斑席・小町席のことは、「踐祚大嘗祭式大嘗宮」条には見えず、同条では、室の「表裏以_レ席」とするだけである。南の二間の堂については、同条に「其堂東南西三面、竝表葦簾、裡席障子、但西面二間卷_レ簾」とあり、「儀式踐祚大嘗祭儀」と同規定である。

従来、看過されていたことは、神座が鋪設され、天皇が神を迎え神饌を親供（しんぐ）される正殿の北三間である室の壁の化粧内装表面に、伊勢斑席を使用していることである。

また、「儀式踐祚大嘗祭儀」に「正殿東南横御廁一字^{長一丈、廣八尺、高七尺、西戸・壁并扉等制同正殿}」とあり、正殿の東南に構作される、御廁（みかわや）の西戸・壁・扉は、正殿と同じ仕様であることが規定されている。正殿の壁は北三間の室にしか設けられないので、御廁の壁も正殿の室と同じく、表（内装表面）には伊勢斑席、裡（外壁）は小町席を用いて化粧されていたこととなる。

伊勢斑席と小町席で内装を化粧されていたことが史料上確認されるのは、正殿の室と、正殿の東南にある御廁だけである。悠紀院の構作に用いられる料は、「儀式踐祚大嘗祭儀」に「所_レ須楮六百荷、柴千二百荷、葛二百荷、椎枝二百五十荷、承塵骨料檜樽卅四村、葺草千圍、葛野席百五十枚、小町席百枚、伊勢斑席五十枚、其主基院制作・装束皆准_レ悠紀_二焉_一」とあるので、悠紀院の正殿室と御廁で使用される伊勢斑席は五十枚であることが知られる。

黒木造りについて述べておくと、黒木を用いて殿舎を構作することは、『万葉集』の次の歌に見える⁽⁹⁾。

①『万葉集』卷八「太上天皇御製歌一首 波太須珠寸、尾花逆葺、黒木用、造有室者、迄万代（はだすすき 尾花逆葺き 黒木もち 造れる室は 万代までに）」（一六三七番歌）

②『万葉集』卷八「天皇御製歌一首 青丹吉、奈良乃山有、黒木用、造有室者、雖居座不飽可聞（あをによし 奈良の山なる 黒木もち 造れる室は 座せど飽かぬかも）」（一六三八番歌）。

右二首は左注に「右聞之、御_三在左大臣長屋王佐保宅「肆宴御製」とあり、一六三七番と一六三八番の歌は、左大臣長屋王の邸宅に、元正太上天皇と聖武天皇が行幸し肆宴された時の御製であり、長屋王は、太上天皇と天皇の来臨を賀して、逆葺（さかぶき 萱の穂先を下にして屋根を葺くこと）で、黒木造りの室を構作し、太上天皇と天皇をお招きしている。神代の風を偲ぶのであろうか、居心地が良いと詠われている。

太上天皇と天皇が長屋王邸に行幸された時期は、神亀元（七二四）年二月の聖武天皇即位から同六（七二九）年二月に長屋王が自害される迄の間のことである。

なお、大嘗祭関連の殿舎においても、悠紀・主基両斎国の斎場殿舎と北野斎場の神座殿の屋根は逆葺（倒葺）に葺かれる。

三、伊勢の浜荻（はまおぎ）

前節においては、「儀式踐祚大嘗祭儀」によって、大嘗宮正殿の室の化粧内装表面に、伊勢斑席（いせのまだらむしろ）が使用されていることを確認した。伊勢斑席のことは「踐祚大嘗祭式」を初めとして他の文献にも管見の限りでは見当たらない。この点は今後の課題となるが、「伊勢斑席」とは、濃淡が入り混じって編まれた伊勢産の席のこ

とであろう。席の訓は、『名義抄』法下一〇五に「席シキ」と見える⁽⁹⁰⁾。席（筵・蒔・蒭）は、藁・竹・藁・蒲などで編んだ敷物のことであるが、伊勢と言えば、「伊勢の浜萩（はまおぎ）」のことが想起される。なお、萩は、水辺に自生するイネ科の多年草で、薄（すすき）とよく似ているが、萩は葉・穂が大きいという。

「伊勢の浜萩」は、夙に『万葉集』巻四・五〇〇番歌に詠われており、都人の間でも名高い伊勢の風物となつて来たようである。

碁檀越の伊勢国に往きし時、留まれる妻の作る歌一首

神風の 伊勢の浜萩 折り伏せて 旅寝やすらむ 荒き浜辺に⁽⁹¹⁾

右は、伊勢国に旅する碁檀越（このだんをち）を偲んで、留守居の妻が、夫は伊勢の浜に自生する萩を折り伏せて旅寝していることであろうかと詠った歌である。

伊勢国を旅した碁檀越が如何なる人物かは未詳であるが、この『万葉集』巻四・五〇〇番歌を、巻一の四十番から四十四番までの歌と関連付ける解釈もある⁽⁹²⁾。巻一・四十番から四十四番までの歌は、題詞と左注より、持統天皇六（六九二）年の伊勢行幸の時に詠まれた歌であることが判明している。確証はないが、両歌に関連があるとすれば、碁檀越は持統天皇六年の伊勢行幸時の従駕者であった可能性がある。

持統天皇四（六九〇）年に皇大神宮（内宮）の第一回造替（遷御）が斎行され⁽⁹³⁾、同五年に持統天皇大嘗祭が斎行され、そして、翌六年に伊勢に行幸された。朝廷内に反対意見があつたにもかかわらず、実施された伊勢行幸の目的は、『日本書紀』持統天皇六年三月条を基に推察すれば、皇大神宮の造替に貢献した伊賀・伊勢などの諸国への慰勞

賜録のためであったと思われる。

「伊勢の浜荻」を詠った歌は、『万葉集』以下、『千載和歌集』・『新古今和歌集』・『続古今和歌集』・『新拾遺和歌集』・『山家集』・『夫木和歌抄』など、多くの和歌集に収録されている。

『千載和歌集』卷十七・一〇八九番⁽¹⁴⁾

いかにせむ 伊勢の浜荻 みがくれて 思はぬ磯の 波に朽ちなん(源俊重)

『新古今和歌集』卷十・九四三番

いく夜かは 月を哀と ながめきて 浪におりしく 伊勢のはまおぎ(越前)

風さむみ 伊勢のはまおぎ わけゆけば 衣かりがね 浪になくなり(前中納言匡房)

都の王朝人によって詠われた「伊勢の浜荻」については、神宮宮司・鹿島則文の命を受け、明治二十八年に刊行された『神都名勝誌』の「浜荻」の項に参考となる記事がある⁽¹⁵⁾。

浜荻 天狗石の南巻町許、道の右にあり、土俗、片葉の蘆と云ふ、四方に石甍を築けり

往古ハ、此の辺、三津湊よりの入江にて、総べて、蘆荻の洲なりきといふ。近世、堤防を設けて、潮水を塞ぎ、数町の田圃を開墾せり。而して、浜荻の旧地を存せむとて、僅に、数坪の所に、蘆荻植ゑたり。勢陽雜記に、最も名高き致景の所も、かく浅ましくなり侍るなり。此の後、跡方もなく、風の音さへ無くならむこと、心あらむ人

いかでか悲しまざらむやと記したり。されば、其の頃、已に、今如く変りたりしなるべし。

地元の人は、「浜萩」を片葉の蘆と云う。三津湊（みつのみなと）よりの入江で、近辺一帯に蘆萩が群生していたが、近世、田圃開墾のため潮水を塞ぎ、ために浜萩の名勝地が失われた。浜萩の旧地を記念して数坪に浜萩を植え、石畳を築いた。また、『勢陽雜記』も浜萩の名勝地が失われたことを嘆いているので、蘆萩の群生が消滅したのは、その頃からのこと、と記している。

三津は、現伊勢市二見町三津。三津は御津の意で、『倭姫命世記』によれば、倭姫命がこの地に船を留め、三津村と名付けたとする。また、『勢陽雜記』は、津藩士の山中為綱が明暦二（一六五五）年に著した地誌である。

二見の三津に群生し景勝地を形成していた三津の浜萩は、江戸時代初期には治水工事のために失われてしまったようであるが、この三津に代表される自生の浜萩が、『万葉集』の時代から都人に詠われた「伊勢の浜萩」であろう。

大嘗宮正殿の室の化粧内装表面に用いられる「伊勢斑席」とは、伊勢に自生する「伊勢の浜萩」を素材として編まれた席のことであると考えられる。

では、何故、「伊勢の浜萩」を素材として編まれた席である「伊勢斑席」を、大嘗宮正殿の室の化粧内装表面に用いたのか。答えは自明で、卯日の夜と翌未明に、都から遠く離れた伊勢から来臨される天照大神（皇祖神）を、「伊勢の浜萩」で編まれた「伊勢斑席」を用いて壁を化粧した室に、お迎えするためであろう。

ここまでの行論に誤りが無いとすれば、天照大神が大嘗祭の御祭神であることは、文献上、平安前期の「儀式踐祚大嘗祭儀」まで遡って確認されることとなる。

- 注
- (1) 拙著『日本古代即位儀礼史の研究』第一篇一章(思文閣出版、平成十一年)参照。
- (2) 神道大系『踐祚大嘗祭』(神道大系編纂会、平成二年)所収。
- (3) 木本好信『江記逸文集成』(国書刊行会、昭和六十年)に拠る。
- (4) 図書寮叢刊『九条家歴世記録』一(明治書院、平成元年)に拠る。
- (5) 岡田莊司『大嘗の祭り』、学生社、平成二年。
- (6) 現存本『儀式』十巻が平安前期の『貞観儀式』と考定されることについては、所功「大嘗祭」儀式文の成立」(同『平安朝儀式書成立史の研究』、国書刊行会、昭和六十年)を参照。
- (7) 『訓読・注釈 儀式踐祚大嘗祭儀』(思文閣出版、平成二十四年)の参考図10参照。
- (8) 「踐祚大嘗祭式」では竹簀とする。
- (9) 『万葉集』は古典文学大系本に拠った。
- (10) 『類聚名義抄』、風間書房、昭和五十三年。
- (11) 古典文学大系本『万葉集』の訓読文に従った。
- (12) 日本古典文学全集『万葉集』一(小学館、平成六年)二八二頁。
- (13) 『太神宮諸雜事記』(神道大系 神宮編一所収)を参照。
- (14) 『千載和歌集』・『新古今和歌集』は、新日本古典文学大系本に拠った。
- (15) 『神都名勝誌』、皇學館大学、平成四年。